

自然栽培の農業

細野診療所 広島診療所
山崎 正寿

青森県のリンゴ農家の木村秋則氏は、到底不可能と思われた無肥料無農薬のリンゴ栽培を非常な苦労の上に成し遂げた。リンゴの木ほど農薬散布の欠かせない木はないのに、それをしないで栽培しようというのだから並の努力ではない。周囲からも「頭がおかしい」と非難されながら、十一年目に白いリンゴの花を咲かせ、糖度の高い、腐らないリンゴを作り出したという。「奇跡のりんご」(幻冬社)や「リンゴが教えてくれたこと」(日本経済新聞社)の本に、その経緯が書かれている。彼はリンゴだけでなく、米や野菜やお茶なども無肥料無農薬の「自然栽培」を実践し、人々に指導している。リンゴの栽培は、人がリンゴを作っているのではなく、リンゴが育ち易いような環境を作ってやることだと言っている。リンゴの育つ土地であり、周りに生える雑草であり、集まってくる虫や生き物であり、何よりもリンゴの木が生き生きと自然に育っていることが大切であるとしている。それが「自然栽培」という考えであるとのこと。木村氏が影響を受けたのが、先年亡くなった愛媛県の福岡正信氏の「自然農法」(わら一本の革命)であったそうで、むろん無肥料無農薬で不起耕直播という全く手を加えない農法である。

福岡氏や木村氏の考え方は、米でも野菜でもリンゴでも、人間の都合で農薬を撒いて虫を除いたり、作物の収量を増し、味を良くするために、多くの肥料を施したり、出来るだけ人の手をかけて栽培するのではなく、その作物が生き生きと育つ環境を作ることを実践している。山々の草木は肥料もやらなければ、農薬を撒かなくても、害虫に侵されることもなく、立派に育っているのであって、豊かな土壌、刈り取られていない雑草、多種多様な虫や生き物が共存しているのである。人間だけが特別な存在ではなく、木も動物も花も虫たちも、互いに生き物として自然の中に共生しているというのが、基本的な考え方である。面白いことに、無農薬無肥料のキャベツ畑にはあの青虫はいない。土がよくでき、バランスのとれた土壌では、農薬を撒かなければ害虫は発生しないというのである。一体、害虫に侵されない大豆を作るために、わざわざ遺伝子組み換えまでして、害虫に強い大豆を作ろうというアメリカ式発想とは全く逆のことが自然栽培では行われているのである。福岡氏も木村氏も多量の農薬と多量の肥料を与えるアメリカ式農業では、次第に土地の力が劣化してしまい、ますます多農薬多肥料とエスカレートしてくると言っている。

「自然栽培」の考え方は、生きとし生けるものの存在を認め、自然の絶妙な力によって農業を行うという、極めて東洋的な思想をバックボーンとしている。これは我々の漢方医学にも当てはまることである。現代西洋医学は細菌やウイルス

を徹底的にたたき、悪性新生物も徹底的に押さえ込もうとする。丁度、多量の農薬と多量の肥料を与え、大型機械でおこなうアメリカ式農業と同じである。

あのインフルエンザの治療にしても、現代医学では抗ウイルス剤しかないように言われるが、漢方では初期の太陽病であれば麻黄剤、少し進んで高熱や咳の少陽病では柴胡剤を用いることによって、十分対応し治すことができる。我々の持っている治癒力を最大限に発揮させることを重要視している。木村氏のリンゴの木も斑点落葉病にかかると、その部分の葉を枯らして穴をあけ、その周囲に小さい葉っぱを出して補うそうである。まさにリンゴの木の持つ自然治癒力そのものである。

現代の病は複雑化し重症化し、自然治癒力を頼みにした医療だけでは、十分な対応が出来ないかも知れない。しかし、高度の医療、先鋭化した医療が進めば進むだけ、漢方医学の持つ生体の治癒力を大切にする医学が大きな意味をもって来るのではなかろうか。もう数ヶ月の寿命と宣告された転移性の癌患者が、漢方薬の力で数年以上も元気で過ごせるなどということは、医療における「自然農法」や「自然栽培」と同じとも言えないであろうか。